
スペンディ

高橋うがい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スペンディ

【Nコード】

N4455G

【作者名】

高橋うがい

【あらすじ】

世界的に根強い人気を誇るダイエット食品『スペンディ』というキャンディ。それに人生を狂わされた男の闘い。

前編「あまいわな」

自慢だが——俺は随分と異性から好意をもたれやすい体質だ。これは異性を引き付ける魅力ではなく体質。…これは体質でもなく病だ。やまい

誰が嫉妬に狂って言ったかは知らないが異性から好意をもたれるのは罪の一つだ。罪——ならば当然、罰を受けなければならない。その覚悟を必要とされる局面に連日立ち会っただが、俺は『特別な存在』の為その辺はぬかりなくやっていけている。

元気ですか？ またお食事に連れて行ってくださいね。（はーと無機質に音を鳴らす機器の画面に映る文字を見て、笑みがこぼれる。こぼれて、手のひらに収まる機器に滴となって落ちてしまいうだ。

メールを送信してきた女は酷くやつれていた。記憶に潜ダイヴして探した画像の女はさながら数日餌をもとめ続け彷徨い歩く野良犬。本来ならば人間の食すことが不可能な、しかし一応は『食品』として公認する政府の下す横文字のマークをつけられているものでも食らいつきそうな卑しい顔だ。

厭いや——食らいついた結果が醜悪なこの顔か。

断る理由も特にないので女に食事に誘う短文を作成した。そこに感情はない。リビドーの片鱗もない。

無…。

無表情のまま、指で番号を押していく。

感情を表すかの無機質な音はパズルゲーム感覚で文字を作っていく。

メールを送信後、俺は息を吐いた。そこに感情はない。徒勞の念もない。

…情。

責めるなら俺ではなく、俺をこのように成形した俺の肉親を恨む

べきだ。それでも足りないならば俺の前世。：俺が転生するであろう存在も譲ろう。

携帯電話をスケルトンテーブルの上に置き、それと交換にいっしょに一袋のキャンディを掴む。

摘まむと包装がざわざわと音を鳴らす、またしても無機質な音。軽いキャンディ。

とても軽いキャンディ。

だけど、罪は重いキャンディ。

成人が一日に摂取するのに必要なカロリーを、きっかり、ちょうど、ジャスト、含む『スペンディ』だ。これを一つ舐めるだけでいい、他を食す意味を完全に亡くす、すなわちそれは減量に繋がる。^{ダイエット}

よって三年前から、女性——だけ——の間で世界的に流行している——流行したままだ。流通してはいけない作用を孕んでいるのは黙認されているのか、はては気付かれていないのか。その点を追及する事は俺には出来ない。仮に追及出来る立場にいても追及する気は毛頭ないが。

「ざまあねーな…」

自分にたいしてか、野良犬女に言ったのか、名も知らぬ人物に言ったのか——。意志と離れた力によって俺の口は動いていた。

そのついでと言わんばかりに、開かれた口に包装から解き放った一粒のキャンディを放り込んだ。

舌の上で執拗になでられて唾液と溶けていくキャンディの味は、
「無情」

「やあ、少年」

待ち合わせのカフェに着くと既に彼女はいた。白いテーブル上にあるグラスの茶色い中身の減り具合をみる限り——五分程度か——
「待たせてごめん」

「いいっていいって、私もつい五分前にきたところだから」

——正解だった。

「俺は女性を待たせたくない主義なんだよ、たとえ五分程度でも」
よくもまあこんなにも心にならない言葉を嘯けるものだ、と自らに感心する。

彼女は口元に手を運び、くすくす、と笑った。グラスに触れていてついたと思われる水滴が指先から不健康を示す紫の唇につき、光る。

「いいからいいから、まあコーヒーでも飲みなさい」

「ああ」

俺は首肯してから店員の元へ向かった。

「いらつしやいませ」

女性店員は充血した目を細めながら言った。それが笑顔だと気付くのに数瞬を要した。

「ご注文は」

引き続き、笑顔を維持する店員はメニュー表を差し出す。

「水を」

メニュー表を一瞥もせず即答。

店員は充血した目でこちらの意志を確認するように見つめてきた。その目は『あんたは何しにカフェにきたの』と語っている。その語りに答える、

「水でいい」

『スペンディ』を食べるようになってから、常に喉が悲鳴をあげるように渴いてしょうがない。常に寝起きの時の感覚、本能のまま冷たい水を喉が欲する貪欲さだ。

戸惑う店員を急かす為にジャケットのポケットからコインを一枚取り出し、握らせた。

「水道水で構わない」

店員は、かしこまりました、と納得がいけない表情で言ってからオーダーを告げにいった。

「いつ振りだっけ？」

「多分ひと月」

「そうかそうか、と頷きながら彼女がにやにやと口元を歪める。「この一か月で何人抱いたの？」

「下品な質問に呆れる。言動が汚い女は容姿、生活、すべてが汚く思える。」

「さあね」

返事を濁すと、彼女の口元の歪みは更に酷くなった。

「何人だろうと、どうでもいいけどね」

答えは、ゼロだった。

というより生涯ゼロのままのつもりだ。

俺は『女』を知らないまま死ぬ。それは変えられない結末だと理解している。

「どうでもいいなら聞かないでくれよ」

「純朴そうな少年が照れた演技をするのを見て、彼女は嬉しそうにストローでコーヒーをすすっていく。」

「あんたモテるからなあ、なぜか」

「『なぜか』ね」

「ホント不思議だわ」

「『不思議』ね」

「鸚鵡返しやめてくれる？」

「彼女は顔を傾け、「ちゃんと話しようよ。久々会ったんだからさあ」

「そうだね」

「で、話し戻しちゃうけど、一か月なにしてたの？」

「特に何もしてないけど」

「本当？」

「嘘」

「やだもつ、と彼女は愉快そうに手を叩いた。紫の唇が揺れている。」

「勉強だよ。ずっと勉強。勉強が終わっても勉強」

「ガリ勉だ」馬鹿にした口調。

「そうそう。ガリ勉です」

「ガリ勉じゃモテないよ……って、あんたモテモテだったね」

彼女の楽器となった細くやつれた手が不快な音をたてて、俺は吐きそうになる。

俺が黙っていたのが気になったのか、彼女は腹を窺うようなしぐさを見せて腰をあげた。

「そろそろ移動しようか」

「ああ」

席を立つ前に水を一気に飲み干した。渴いた喉を、その時だけ、渴いてない喉にする。

このカフェを後にして向かう先は分かっていた。彼女は大人の女性だ。そして俺は性欲に身を任せる猿であるう年齢の男。

——ネオンライトの街。艶やかな光の街。

「正直あんまり気乗りしてないでしょ？」

わかってるんだから、とも彼女はつぶやいた。わかっているのに聞く無意味さに気付いている。

「ああ」

「ほら、またその生返事。うわのそら」

「ああ」

「ああ……」

「ああ」

「ああ……」

ふふ、と彼女は何がおかしいのか、肩を震わせながら俺の生返事を真似し始めた。

ホテルに向かう車中ずっと隣に座る彼女のおおきく開いた胸元を無視して鮮やかなネオンの光とそれに負けじと輝こうとする人の群

れの喧騒をぼんやり眺めていた。

——もうすぐこの喧騒は消える。消えたのに気付かず、消え、また何事もなかったように現れるのだ。

腕時計に視線を落とす。時計の針はもうじきその時をさそうとしていた。

窓から見える景色の移ろいがゆっくりとなり、ややあつて固定された。

停車されたタクシーから降りると彼女が、

「いいよ、払つとくから」

と財布を開きつつ言った。

街を彩る輝きが美しい。車を降りてやっとその輝きに触れた気がした。

行き交う男女を眺めていると、まるで人類の縮図だな、などと格好つけた言葉を漏らしそうになる。

「どうしたのよ、なに悟つたような面してんの」

肩をつついてくる彼女は財布をヴィトンのバッグにしまう。

「まるで人類の縮図だな、なんてね」

「なにそれ」

赤々した舌を出し彼女は笑った。その目は充血していた。不健康な赤みを帯びて——光っていた。

「あ——」

「なに？」

就寝前、それもなかなか寝付けない時、時計の針がやけに気になるように、

「——きた」

「へ」

時計が音が、音なのに、音を連れ去って、日付の変わる時間——つまり零時を知らせた。

その瞬間——

さっきまでおどけていた。さっきまで隣で俺の真似をしていた。

さっきまでコーヒを飲んでた。さっきまで笑っていた。さっきまで唇を紫にしていた。さっきまで目を赤く光らせていた。…さっきまで、さっきまでは。

彼女は人の姿を失った。

数々の関節が外れ、骨が生々しい音と共に軋み、陽が沈み、月が昇るかのように当然のごとく、ささやかな日常性を殺して、

彼女は、

今日の『^{ターゲット}敵』となった。

——後編へ。

後編「こえていく」

だがしかし、だ。

今は彼女——化け物にとっては俺が敵だ。^{ターゲット}それも逃げ惑う兎、地を這う蟻のような弱者。そりゃそうだ俺は今、人間だから。

一分間。

一分間だけでいい。

一分のタイムラグの間だけ、人間の俺は逃げればいい。

いわば一分間の鬼ごっこだ。なあにたいしたことはない。逃げるだけなら本能さえあれば馬鹿でもできるのだ。

この街の大方の地理は先ほど移動の車中で復習しておいた。

「大丈夫だ、いける」

自己暗示を唱え、拳を作りそれを血が流れるぐらいの強い力で握りしめ、化け物のいない方向へと踵を鳴らした。

『スペンディ』

一分間、この単語が頭の中を駆け巡っていく。いつも、そうだ。

『スペンディ』のせいで俺はこんな化け物と闘わなければいけない。俺は、俺を捨ててまで闘わなければいけない。

『スペンディ』による公害が、元の間人だった体のゆうに二十倍はある巨体を揺らし迫ってくる。四つん這いで迫るその体は先ほどまで乗車していたタクシーを吹き飛ばし、街の色彩の象徴である街頭をへし折り、まるでその空間そのものを破壊するかの勢いで猛然としている。

「ちくしょう……！」

と、俺が切れる呼吸の隙間からちぎった言葉を吠えたと、それに反応したのか猫とは形容しがたい醜い存在は夜の空になにかを訴えるように咆哮した。その口からは赤い血のような涎が垂れている。涎が気泡となって飛び、縦に並ぶビルのガラスにへばりつく。

余は空腹だ

言語表現不可のその叫びは、そうとしか聞こえない。

毎晩この罰を受ける度に俺は――

止められた時間の中での一分間。その矛盾性について頭をまわすとが、答えは三年の歳月を費やしてもひねり出すことができていない。そもそも答えなどありはしないのか？ そんな漠然とした絶望が浮かぶだけだ。

「そうだ、いい子だ。こつちだ！」

前回の闘いで半壊したビル群の合間をすりぬけ『昨日』までの時の中ではカップルが溢れていた公園を目指す。あそこなら、その一心が筋肉を軋ませる。

――隠れる？

そんな真似は出来やしない。

許されない。許されないのだ。

猛追してくる化け物の吐く鼻息が、風が、刃物となって襲う。かまいたち、かまいたり、かまいきり、きりきりと刻まれていくジャケットは一步一步進むごとにただの布きれへと近づいていく。

「殺す気か……！」

そうだ、殺す気だ。そんなことは分かっている。理解しがたい虚構を虚構であるべき現状を――現実だと突きつけるのは本能。

動悸が脈打ち、脚が吹き飛んでしまう勢いでまわる、身体を前へ前へと進める。息が、息が、呼吸が、ちくしょう寒い。震えるのは肩だけか？ 唇だけか？ さっきから化け物の起こす風圧で髪が踊り狂うようになびいている。髪が目に入る。散髪しなくちゃな、そろそろ散髪しないと前髪が長いと色々やっかいなんだ。一見どうでもよさそうなのが案外やっかいだったりするんだ。

「死んでたまるか……！」

そうだ、ここで俺が死んだどうなる？

この止まった空間でくたばったら、俺はどうなる。向こうに存在する俺はどうなるんだ？

地鳴りのような音量のくぐもった叫び。

まるで知らぬ間にヘッドフォンを装着されたかのような零距离で放たれる鮮明な叫び。

俺と同じの、渴いた叫び――

あと少し、

「ッ、死んでたまるかよッ！」

背後から横殴りにしようとした化け物の太く邪悪な腕をかわし、高く、月に触れそうな力で跳躍した。

ただっ広い公園で俺は『男』であるが為に受けるタイムラグの一分間を、超えた。

「ったく、悪趣味すぎるぜ――ッ！」

まだかるうじて『人間』の姿を保つ体を急停止して、背後に、もうすぐ鼻先まで迫っていた化け物に殺意と共に渴いた喉から血がでる程に力強く、叫んだ。

そして、時は満ちて、俺は咆哮と共に、人間でなくなる。対峙する敵を倒す。首筋を噛んで鮮血を浴びて、返り血を舐めて。四肢を引き千切り傲慢な態度で吠える。または屍の上にあぐらをかいて不敵な笑みを浮かべるかもしれない。俺は俺を失ったら、残酷性に溺れる。きつとそうだ。だから、生きていて、だから、明日を掴むのだ。

生きるために、生にしがみつくために――関節を折り、骨を軋め、言語表現不可能な渴いた声が、淀んだ空に染み込んでいった。

咆哮が、咆哮をかき消した。

*

「ざまあねーな……」

今日の分の罰の終わりを告げる時計の針の音。

――っすれていく。

——すれていく。

——れていく。

やけにその音が気になって寝付けなかった意識が、ぼうつと揺れる遠く深く沈む堕ちる弾ける散っていく。

散った意識はまた集められる…。

…向こう側へ。

無機質な感情は無機質な俺の元へ。一粒のキャンディとなって。

またかよ。

まだあんのかよ。

まだやっていいのかよ。

まだ舐めていていいのかよ。

——ていく。

——いく。

——ッ。

*

「どうしたの。早く行こうよ」

清涼感のある白いワンピースを着た彼女は俺の手を握ってせかした。すらりとした女性らしいラインをした脚線美をえがく先にあるつま先はホテルの方角に向けられている。

あたりを見渡す。挙動不審だと思われても構うことはない。

『たつたいま』吹き飛ばされて空中で回転し道路に散ったタクシーは、ばたん、と後部座席のドアが自働で閉められて運転手が、まいどどうも、という意味でぺこりと頭を下げていた。

続いて、へし折れたはずの街頭は…良好だ。黙々と街を照らしている。

安堵し、徒労の息が漏れた。

「何よ、溜息なんかついちゃって。怖気づいたの？ ……もしかして、またなの？」

ふふ、と小馬鹿にしてせせら笑う彼女の口元は人間的な赤みを取り戻しつつあった。

「…そうだ、またなんだ」

うつむき眩くと、彼女はがっかりした様子で、

「なあんだ」

「ごめん」

「ホントあんたがなんでモテるのか不思議。この意気地なし、ビビり、弱虫、プレイボーイもどき、短小」

彼女に罵られながら、俺はどこか、ここにいないような感覚に苛まれていた。彼女の汚い言葉が、粒子となって空気に溶けていくのが見えてきそうだった。

「なあ」

彼女に呼びかける——および警告。

「なによ」

不機嫌そうな彼女のうるおいを取り戻した唇に触れて、

「ちゃんと食べなよ。やつれてるよ」

彼女は一瞬驚いた表情をして、俺が神妙な顔をしていたからか、

「…わかった」

とあまりその発言の意味を深く考えないまま首肯し、頬を染めた。これが彼女と交わす最後の会話となるのを知っていたのは俺だけだった。

「もうここにはいられないな」

彼女と別れて帰宅し、ついてもない生臭さを落とすように病的なシャワーを浴びてから誰に言うでもなく部屋でこちる。

今日見た情景を鮮明に想起する。

半壊したビル。

化け物に踏みつぶされ既に道路としての価値を失った道。

根本から折れた木々。

もう限界だ、あそこは。

こわれた世界の映像を再生すると早急に別の場所に移る必要がある、と感じる。これ以上はもう、もたない。

向こう側にも住んでいる人間がいるはずだと俺は仮定していた。

『スペンディ』の弊害をうけて『あるはずの無い時間』の中でただ破壊されていく空間にも、必ず。

——血の味がした。無意識の内に唇を噛んでいた。紫色の唇が、にじむ血で赤くなる。ひと時の合間だけ、赤くなる。

血の味で我に返った。考える時間は無意味な浪費だ。今は勉強だ。勉強しなくては。

座椅子に腰をおろし、渴ききつていない髪をタオルで乱雑に拭きながらスケルトンテーブルに広げた教科書に視線を落とした。

勉強して、勉強して——『スペンディ』を生み出した企業に入社しなければならぬ。入社して、俺をこんなことに巻き込んだ『スペンディ』について調べる必要がある。なぜこのような物が世界で流通しているのか、そんなことはどうでもいい。俺を『特別な存在』にした人間を明確に、もっと明確に恨むためにはそれが最善なのだ。入社しても『スペンディ』の生産を中止しろ、などと要求するつもりもなかった。

なぜなら——

俺はテーブルの上に置かれたちいさな、手の中に収まるちいさな袋をつまんで、縦に裂いて中身を取り出して、そしてその中身を血で濃い赤を得た舌の上へ——。

——終——

後編「こえていく」（後書き）

最後まで読んで頂き感謝です。

『スペンディ』は『スペシャル・キャンディ』の略です。直訳すると『特別な飴』。ふざけてんのかってくらい実に単純。

今はみかけませんが、ちよいと昔におじいさんが孫に飴をあげるという内容のCMがありました。「彼もまた、特別な存在だからです」という言葉が印象的なCMです。そのCMをモチーフに、いったら少々ずれますが「ああ、なんかいいな」なんて思っただいぶ前に考えた話です。

本当はもつとほのぼのした話でしたが、最近読んでいる小説のアクションシーンに感化されて何を血迷ったかモンスターの登場する暴走ストーリーになっちまった。

僕の書く話というのは基本的に『静』なので『動』を書くのがどうも苦手で、かなり手こずりましたがどうでしたか？

私的にはアクションを書くというのは良い経験になりました。

とはいいつつも主人公と彼女がドンパチする描写がないじゃないか。そうですね、ないんです。カットです。意図的に外しました。主人公が立ち向かうのは目の前に現れる相手ではなく、もつと先にいる巨悪なのですからカットで構わんでしょ。 （短編だからというもある）

ではでは。気分はもう短編集の連載のほうもよろしくお願いします。す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4455g/>

スペンディ

2010年10月8日15時09分発行